

## 研究室を訪れた人々

1997年度

1997年度も、幸運と努力の相乗効果(?)のおかげで、外国からの素晴らしい人々をわれわれの斯拉ヴ語斯拉ヴ文学研究室でお迎えして、講演会やシンポジウムを行うことができた。こういった催物は外からは華やかに見えるかもしれないが、その情はといえば、手間も金もかかるばかりの「カッコ悪い」地道な準備を経てはじめて可能になることであり、そのため多くの大学院生の皆さんに献身的な努力を強いることになり、また学内外の多くの関係者のご協力をお願いすることになった。

しかし、ちょっとカッコをつけて言えば、こういった活動の「教育的意味」にははかり知れないものがある。国際交流が以前よりもはるかに簡単になったと言われる今日でも、ロシアや欧米の第一線の研究者や、一流の芸術家・文化人と直接触れ合うことのできる機会は、努力して作らないかぎり、毎日降ってわいてくるわけではない。もちろん、触れ合ったからと言って、それが直ちに研究上の成果に結びつくというものでもないことも当然だが、若いときに「本物」を直に見たという経験は、おそらく一生、何らかの形で残り、研究にも深いところで影響を与えつづけるのではないかと思う。

もう一つ大事だと思うのは、これもちょっと口幅ったい言い方になるが、研究室の活動を少しでも社会に開いていくということである。ジャック・ロッシ氏の講演会や、詩人アイギ氏を迎えての国際シンポジウムのような、大きい規模の公開の催物(いずれももちろん入場無料)は、学外からの一般の聴衆を多く集め、社会的な関心にも応えることになった。さらに、こういった催物が特に若い聴衆にインパクトを与え、ロシアに対する興味をかきたてたとすれば、素晴らしいことだ。特にシンポジウム「ユーラシアの風」に来ていた多くの若い聴衆たち(その大部分はどうも東京外国語大学の学生たちのようで、わが東大の学生は残念ながらさほど多くはなかった)がステージを見つめる目のきらきらとした輝きは、ロシア研究の未来の可能性を示しているようで、私としてはそれだけでも苦労してシンポジウムを準備した甲斐があったと思った。

以下、簡単に、1997年度の記録を簡単にまとめておくが、特に重要だったロッシ、ワイリ、アイギの3氏については、彼らを迎えての催物の準備と実施に積極的に関わってくれた大学院生の田中まさきさん、今田和美さん、そして前田和泉さんにそれぞれ別途に、若い視点からの印象記を書いてもらった。

ジャック・ロッシ (Jacques Rossi) 氏講演会 「共産主義の運命」

1997年6月6日 文学部3番大教室 司会：安岡治子助教授(東大総合文化研究科)

イントロダクション：内村剛介氏 通訳：米原万里氏

ジャック・ロッシ氏は1909年生まれ、フランス人のソ連研究家。もともと共産主義者として活動するが、スターリン時代にソ連で逮捕され、その後、24年にわたってソ連の強制収容所で辛酸を嘗めた。その経験を踏まえて編纂された『ラーゲリ詳解事典』、詩的な文体で綴られた体験記『さまざまな生の断片』は、どちらも日本語に訳されている。88歳の高齢にもかかわらず、ロッシ氏は矍鑠たるもので、講演は彼にとっては「外国語」であるロシア語で行ってくれた。この講演会が実現したのは、ロッシ氏のシベリアの強制収容所時代からの親友、内村剛介氏の尽力のおかげである。

なるべく多くの一般聴衆を対象とした大教室での通訳付きの講演を、という内村氏のご意向に応えるべく、文学部では大きすぎて普段授業には誰も使わない3番大教室(約300人収容)を借りたため、がらがらだったどうしようという不安があった。しかし、新聞などに掲載された予告と学生たちが手分けして宛て名を書いてくれたダイレクトメールの効果があって、幸い200名ほどの聴衆を集めることができた。講演のテーマのせいも、普段の文学関係とはだいぶ違う、様々な層の人々が来ていて、みな食い入るようにロッシ氏の話聞いていたのが印象的だった。その熱気は、講演会後の懇親会の席上にも持ち越され、主催者をひやひやさせる場面もあったが、そのことも含めて若い学生諸君にはかけがえのない「教育的」体験だったのではないかと思う。政治的イデオロギーとはほとんど無関係に、衣食足りた豊かな環境でロシア語ロシア文学研究に打ち込んでいるわれわれの学生たちに、ロッシ氏の語るラーゲリでの過酷な体験はまったく「別世界」、いやほとんど「別の星」のことに思えたに違いないのだが……。

イーゴリ・ザイツェフ (Игорь Зайцев) 氏 講義「現代ロシアの出版事情」

1997年6月13日 スラヴ語スラヴ文学演習室

ザイツェフ氏は、モスクワで出版社 «Права человека» (ヒューマン・ライツ社) を経営し、サハロフの回想やロイ・メドヴェージェフのロシア革命論を始めとする社会関係の本を中心に、意欲的な出版活動を展開している若き出版人である。私(沼野)も1997年3月にロシアに行ったときには、彼の好意と文学関係の人脈にとっても助けられた。今回は現代思潮社の招待で来日中のところを、同社の編集長・渡辺和子さん他のご好意で、わが研究室でも講義をしていただければいいことになった。ロシアの出版事情について、歴史的概観から、現状に至るまで、極めて分かりやすく、現場にいる出版人の立場からの貴重な講義を聞くことができ、たいへん有益だった。

ピョートル・ワイリ (Петр Вайль) 氏

講義「現代ロシア文化：祖国と亡命のはざままで」

1997年11月7日 スラヴ語スラヴ文学演習室

ピョートル・ワイリ氏は、現代ロシアで最近活躍が目ざましい文芸批評家。1977年にアメリカに移住し、以後ニューヨークに住み、亡命ロシア出版界を舞台に執筆活動を行って

きたが、最近ではロシアでも著作がつきつぎと出版されている。現在、プラハの「ラジオ・リパティ」勤務。現在執筆中の世界文化紀行の一環として日本についても書くための「取材旅行」でプラハから来日した。日本では彼の著作としては、アレクサンドル・ゲニス氏との共著書『亡命ロシア料理』（未知谷、1996）の翻訳がある。ちなみに、ゲニス氏は1996年度シンポジウムのために既に来日を果たし、本研究室の多くの大学院生たちとも親しく付き合ってくれた。偶然とはいえ、この二人組の批評家のもう一人がやはり来訪してくれることになったとは、やはりよほどの縁があるのだろうか。それとも世界が狭くなったというだけのことか。

## 国際シンポジウム

「ユーラシアの風」——アイギ・グバイドゥーリナ・ソクーロフ——

詩と音楽と映画にみるロシア文化の広がりとは日本

1997年12月12日 文学部3番大教室

主催：東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学教室

共催：ユーラシア・フェスティバル実行委員会 後援：外務省

協賛：日本ロシア文学会国際交流委員会、(株)エン・ダ、書肆山田、(株)パンドラ

このシンポジウムのために、本研究室はチュヴァシ人のロシア語詩人ゲンナジイ・アイギ氏の招待責任者となった。彼を日本に呼ぶまでの手続き上の苦勞あれこれについては、別の場所（『るしおる』書肆山田）に書いたのでここには繰り返さないが、アイギ氏の日本入国ヴィザ申請手続きに際しては、わが研究室からモスクワに留学中の二人の大学院生、毛利公美さんと坂上陽子さんの果敢かつ迅速な行動にたいへん助けられた。

シンポジウムには、「アストレイヤ」による音楽の演奏も盛り込まれていたが、普通の授業しか想定していない教室でこの種の「鳴り物」を入れることが設備・技術面でいかに難しいか、実際にシンポジウムをやってみてよくわかった。東大のように大きな規模の大学で、音楽や演劇のパフォーマンスや映画の上映ができる多目的ホールがないというのは、不可解というか、許しがたく時代後れのほとんど恥ずべき非文化的な事態であると、改めて思い知らされた次第である。

シンポジウムのプログラムは、午後1時から6時半まで半日にわたって続く盛り沢山のもの、ここにはその内容はとうてい詳述できないが、あらまは以下の通り。

司会・企画構成 沼野充義 通訳 吉岡ゆき

1. 詩——ゲンナジイ・アイギ（詩人）と究極のロシア詩

・アイギ 自作詩の朗読（ロシア語）および日本語訳の朗読

日本語訳：たなかあきみつ（書肆山田『アイギ詩集』訳者）

・アイギ 講演「自作を語る——沈黙としての詩、停止した詩」

2. 音楽——ソフィア・グバイドゥーリナと即興演奏グループ「アストレイヤ」

- ・ヴィクトル・ススリン（作曲家） 講演「音楽における東と西」
- ・「アストレイア」による民族楽器を使用した即興演奏
- ・グバイドゥーリナ（作曲家） 講演「音楽、詩、静寂」
  - \* 「アストレイア」演奏メンバー：ヴィクトル・ススリン、アレクサンドル・ススリン、ソフィア・グバイドゥーリナの3名
- 3. 映画——アレクサンドル・ソクーロフの世界
  - ・ソクーロフ 映画「ロベール 幸せな人生」上映 解説・児島宏子
- 4. 講演と討議——ユーラシアの風
  - ・講演1 亀山郁夫（東京外国語大学教授）「ユーラシア文化の可能性」
  - ・講演2 中沢新一（中央大学教授）「東方のソフィアとエロス」

\* \* \* \*

#### 【ロシアの諸大学との学術交流について】

最後にこの場を借りて、現在進行中の、ロシアの諸大学との学術交流協定締結へ向けての作業について、簡単にご報告させていただきたい。1998年2月17日には、モスクワ国立大学(MFU)のウラジーミル・ソコロフ副学長代理（国際交流担当）が、ロシア大使館のネチポレンコ一等書記官と、日本語の専門家であるストリジャク・モスクワ大学助教授、他一名とともに東京大学を訪れ、東大との学術交流の推進について話し合った。東大側で対応にあたったのは、和田春樹・社会科学研究所所長、桑野隆・総合文化研究科教授および本研究室からの沼野の3名である。

じつはモスクワ国立大学、ロシア国立人文大学を始めとするロシアの諸大学と東大との間で学術交流協定を結ぼうとする動きは、ようやく1997年度に本格化し、同年4月には和田所長・桑野教授および沼野がモスクワ国立大学、ロシア国立人文大学を訪れ、また9月には和田所長・中村健之介教授（総合文化研究科）および沼野が東大の蓮實重彦総長とともに両大学を再び訪れ、それぞれの大学の学長とも会って、学術交流協定締結に向けて話し合いを進めることで基本的な合意に達することができた。

そして、ロシア国立人文大学との交流協定（東大側の担当部局は総合文化研究科）は近く調印の見通しになっている。またモスクワ国立大学との交流協定（東大側の担当部局は人文社会系研究科）については現在、協定案の具体的な文面について調整中であり、遅くとも1998年初夏までには調印にこぎつけたいと考えている。こういった学術交流の活発化の機運に関連して、モスクワ国立大学の総長は1998年4月には東大を訪問したいとの意向を持っている。日露関係が改善へ向かおうとしている新しい大きな流れは、ロシアとの学術文化面での交流に関しても新たな可能性を開いてくれるに違いない。この機運に応えるためにも、われわれとしては今いっそう、国際的な学術交流の展開に向けて努力すべき時期にさしかかっているのではないだろうか。

（1998年2月28日 沼野 記）